

論文

南方熊楠の西洋意識

— 土宜法龍宛書翰の分析を通して —

雲 藤 等*

はじめに

南方熊楠⁽¹⁾(慶応3年－昭和16年)の活動は幅広い分野にわたっている。例えば、後に民俗学と称されるようになる説話や習俗に関する学問は、彼の代表的研究分野の一つであった。ロンドン留学時に『ネイチャー』や『ノーツ・エンド・キーリス』に投稿した“The Constellations of the Far East”, “The Wandering Jew”などの論文は、東西の文化交流を研究したものとして有名である。帰国後も柳田国男と協力して『郷土研究』などに数多くの論考を寄稿し、民俗学発展の一翼を担った。

藻類や菌類など植物学の研究も著名である。この分野での本格的な研究論文は無いが、熊楠はその後半生のエネルギーを『日本菌譜』『日本淡水藻譜』などの図譜作成に注いでいた。資金の問題など種々の事情で未完成に終わったが、もしそれらが刊行されていたのなら、牧野富太郎とともに戦前の日本を代表する植物学者として人々に記憶されていたことであろう。また植物ではないが彼が粘菌(変形菌)研究に従事していたことも、生前から良く知られていたことである。大正6年(1917)8月熊楠は、自

宅の庭に植えていた柿の木に新種の粘菌を発見した。粘菌は腐った木や落ち葉に発生することが当時の常識であったのだが、熊楠のこの発見により世界で初めて生きた木にも発生することが確認されたのである。この新種は後に粘菌研究の権威であるイギリスのグリエルマ・リスターにより採集者南方熊楠の名前をとって「ミナカテルラ・ロンギフィラ」と命名された⁽²⁾。昭和4年(1929)には、粘菌研究者でもある昭和天皇に御進講をするという栄誉を受けている。

さらに注目されるのは、熊楠が学問研究のみに没頭していた学者ではなかった点である。「神社合祀反対運動⁽³⁾」に代表されるように神林や史跡を保護することにも意を注いでいた。新聞や雑誌において神社合祀反対の論陣をはり、柳田国男や中村啓次郎(当時の和歌山県選出の衆議院議員)の協力を得るなど、自己の人脈を駆使して政府や県のやり方を批判する。その他にも「和歌山城保存運動」・「市町村合併反対運動⁽⁴⁾」・「神島保存運動」など様々な反対意見の表明や運動を行ない、実際に史跡破壊の動きを阻止している。このように熊楠の生涯を眺めたときに、広範囲にわたる彼の精力的な活動

* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程4年(指導教員 島 善高)

は正に驚嘆に値するものといえる。

それでは彼のこれら多様な活動を支えたものの、あるいは彼をつき動かしていた思想とはどのようなものであったのであろうか。また、その結果として彼が日本近代史の中で果たした役割とはいかなるものであったのか。残念ながら先行研究でこの問題に触れているものは殆どない。この根本的な問を追求する上で、その活動が本格化する以前の彼の若き日における考え方を検討することは、この問題解明に重要な示唆を与えてくれるはずである。そこで、本稿では南方熊楠の20代から30代にかけての書翰、主に土宜法龍宛書翰を対象として分析を加え、彼が青年期にどのような考え方を持っていたのかを浮き彫りにし、後の活動との関連を探ってみることとする。

1 20代から30代の書翰

熊楠の関係史料の主なものは和歌山県田辺市にある南方熊楠顕彰館に所蔵されている。同館に所蔵されている熊楠の書翰は約2000通にのぼっている。しかし、その内訳を眺めると、残されている書翰はほとんどが40代以降のものであり、20代・30代に書かれたものは多くはないのが実情である（表1参照）。20代から30代にかけては彼が海外に留学・放浪をしていた時期でもあり、日本人と積極的に交際をしていなかったことがその一因であろう。そのような中で、ロンドンに來遊した真言宗の僧侶である土宜法龍（安政元年－大正12年）との往復書翰は重要である。表1を見ると、土宜法龍に宛てた書翰のみが複数年にわたって多数残存していることが分かる。なお、表の中で明治28年（1895）から明治33年（1900）の間が空白となっている

のは、二人の書翰のやりとりが大きく分けて二つの時期に分かれるからである。第1期は熊楠ロンドン留学時の明治26年（1893）から法龍が帰国する明治27年（1894）にかけてである。その後法龍の帰国にともない二人の交流は一端途切れ、再び始まるのは熊楠帰国後の明治34年（1901）からである⁽⁵⁾。これが第2期となる。特に熊楠が那智山に籠もっている頃の明治35年（1902）から同37年（1904）までの書翰はロンドン時代と同じく集中して法龍に書き送っている時期である。

二人は、長文の書翰を認め、互いにその知識の持てる限りを尽くして意見をぶつけ合っていた。主に宗教上の問題について議論を展開し、時には相手を嘲弄罵倒し時には互いの質問に丁寧に答えるなど、親密なやり取りが続いていた。その書翰は、『南方熊楠土宜法龍往復書簡』⁽⁶⁾（以下、『土宜往復書簡』と略記）として刊行され、現在われわれは容易に手にとることができる。これらの書翰では熊楠の独創と言われる「事の学」や「萃点の思想」など、後に「南方マンドラ」と総称される彼の思想が展開されている。

この「南方マンドラ」は鶴見和子の命名紹介以後、熊楠の独創的思想として多くの研究者の注目するところとなっている⁽⁷⁾。しかし、この書翰集が刊行された当時に遺されていたものは、熊楠の法龍宛24通、法龍の熊楠宛31通であり、欠けている書翰が多数あることはわかっていった。したがって、二人が議論した内容を詳しく把握するには未だ不十分であったのである。

このような状況の中、平成12年（2000）に新たに法龍の熊楠宛の書翰50通余が南方熊楠旧邸で見つかった。さらに、平成16年（2004）には

表1 20代・30代での南方熊楠の残存書翰数

年代	西暦	年齢	杉村 広太郎 宛	喜多幅 武三郎 宛	三好 太郎 宛	中松 盛雄 宛	土宜法龍宛		多屋家 関係	略 歴
							顕彰館 所蔵分	高山寺 所蔵分		
明治19年	1886年	20								12月22日米国へ出発
明治20年	1887年	21	5							1月バシフィック・ビジネスカレッジ入学, 8月ミシガン州立農学校に転学
明治21年	1888年	22								11月農学校退学
明治22年	1889年	23								アナバーに滞在, 図書館等で読書
明治23年	1890年	24								
明治24年	1891年	25		1						西インド諸島放浪
明治25年	1892年	26		1	1	1				9月ロンドン着
明治26年	1893年	27					4	8		10月土宜法龍と出会う
明治27年	1894年	28					5	14		
明治28年	1895年	29								4月大英博物館(書籍室)に通い始める
明治29年	1896年	30								
明治30年	1897年	31								
明治31年	1898年	32								12月大英博物館追放
明治32年	1899年	33								
明治33年	1900年	34								10月帰国
明治34年	1901年	35					2	1		那智滞在
明治35年	1902年	36					2	9		
明治36年	1903年	37					5	6	13	勝浦・那智付近で植物採集
明治37年	1904年	38					3	3		10月田辺町へ転居
明治38年	1905年	39								

出典・『南方熊楠邸資料目録』、『高山寺書翰』、『南方熊楠全集』7巻, なお『高山寺書翰』・『南方熊楠全集』所収書翰の年代は推定も含む。また『南方熊楠全集』7巻には年代不明の羽山蕃二郎宛書翰が1通収録されている。この他に, 土宜法龍宛書翰は, 明治27年7月19日付の書翰写し1通が種智院大学長谷文庫に所蔵(『熊楠研究』1号, 1999年, 21-42頁参照), 明治37年6月の書翰1通が和歌山市立博物館編『エコロジーの先駆者 南方熊楠の世界』(和歌山市教育委員会, 2009)で紹介されている。

既に失われたと考えられていた熊楠の法龍宛書翰が発見された。京都榎尾高山寺の収蔵庫に保管されていた法龍のトランクの中に40通余の土宜法龍宛の熊楠書翰が眠っていたのである。これは明治27年から同38年にかけてのものが主であり, 熊楠20代から30代にかけての書翰が大量に発見されたことになる。

これらの書翰は、『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』として活字化し, 刊

行された⁽⁸⁾(以下, 『高山寺書翰』と略記)。

『高山寺書翰』の発見について松居竜五は次のように述べる。「これまでに公刊されてきた熊楠と土宜の往復書簡には, 二人のやりとりのごく一部しか収められていなかったという事実があらためて確認され, 新たな研究の展開が予想されるようになってきているのである⁽⁹⁾」。このように, 『高山寺書翰』は「南方マンダラ」をさらに解明する上で重要なものと位置づけら

れている。

ところで、南方熊楠の思想として「南方マンガラ」は非常に有名であるが、彼が考えていたことは当然それだけではない。『土宜往復書翰』と『高山寺書翰』を通覧すると、それらからは熊楠の教育論や史跡保存論などの意見を見いだすことができる。従来の土宜法龍宛書翰ではあまり注目されてこなかったこれらの意見はむしろ、彼のその後の行動を考える上では「南方マンガラ」よりも重要ではないかと思われる程である。つまり『高山寺書翰』は、「南方マンガラ」の解明に寄与するのは勿論であるが、それと同時に、今まで十分解明されていなかった熊楠の若い日の思想をより詳細に窺うことができ、しかもそれが40代以降の活動につながっていくことを検証することができる点で貴重なものといえる。

以下、これらの土宜法龍宛書翰を中心に、彼の教育論・史跡保存論を眺め、その背後にある彼の行動原理を探ってみたい。

2 教育論

(1) 図書館の重要性

土宜法龍宛書翰を通覧して目につくのは、熊楠が至るところで図書館建設の重要性を述べていることである。その主なものは表2にまとめたが、これを眺めると「学斎を設立し」、「地方に書庫を立て」、「書籍館を作り」などの文言が散見され、彼が一貫して土宜法龍に向かって、図書館建設の意義を訴えていることがわかる。

例えば、明治35年（1902）4月18日付書翰では次のように図書館の役割を述べている。

（前略）故に体裁上入用の誦経、説教の下げ

いこの外宗教の学理は二にまわし、壮年記憶の失せぬ内に可成多く本人銘々所嗜の外学を自修せしめたら、それ以上の事は自分で発生せんこと、浴ずきが浴場にて悟りし如く、鍛工好きが鍛室にて了りし如くならん。故に図書室建ること一番必用なりと存候⁽¹⁰⁾。

これは、土宜法龍が真言宗の学校を建設することについて熊楠の意見をたずねたことに対する回答の一部だと思われる。引用史料の内、省略した部分には、外典（仏教以外の書籍）から勉強した僧侶たちは信心堅固であり、また智慧聰明な人物となっている。これに対して、内典（仏教関係の書籍）から勉強を始めたものは外道に終わってしまう、と述べている。したがって生徒には、最初に体裁上必要である誦経や説教の練習をさせ、それ以外は、記憶力が旺盛な内に、仏教の経文よりも仏教書以外の外学を自習させるべきであると主張する。そして、そのためにこそ図書館は必要だという。図書館で自由に読書をさせ、仏教以外の思想、つまりは広い教養を身につけることが結局は優れた仏教家を育てる重要な方法であるというのである。

ここでの「内典」と「外典」の問題は、明治36年8月20日付書翰⁽¹¹⁾でも述べており、そこではもう少し理屈がわかるように次のような説明をしている。

たとえば金持ちの家に育った子どもは、お金をおろそかにしがちになる、何故ならばお金を稼ぐことがどれほど大変なことなのか、その苦勞を知らないからである。また、天狗にさらわれて富士山の頂上に落され、そこで育った子どもを仮定してみよう、その人は成人した後までも富士山が高い山であることを知らずに世界は

すべて低いものとみてしまう。このように比較する対象が無ければ、自分がどのような環境にいるのかさえ分からないこととなる。同様に内典だけを勉強してみてもそれと比較対照できる外典を読まなければ、自分の勉強していることがどれほどの意味を持っているのか分からな

い。このように考えれば外典を学習する意味が十分わかるだろう、というのである。

つまり、熊楠は「比較」の重要性を訴えているのである。狭い専門分野のみを学習するのは、結局その分野の本質が理解できないままになることを鋭く指摘する。幅広い視野を持って

表2 土宜法龍宛書翰での図書館建設の主張

年 代	年齢	内 容	出 典
明治26年 (1893) 8月	27歳	然るべき学齋を設立し、内外の經典を集め蔵し、また教外の諸品も集め、(略)、自在に読書せしめ、もって英俊の人士を多く出したきことに御座候。	『土宜往復書簡』12頁
明治26年 8月	27歳	むかし了翁僧都は、(略) ついに大書庫を上野に立てて衆僧を益し候由、私も何とぞこれほどのことは致したきに候。	『土宜往復書簡』13頁
明治26年12月	27歳	されば仁者斯道の為に尽す所有んには何卒、地方に書庫を立て、篤志にして資なきものに自活し得べき方便を与へて、就読して自断自見自証せしめ、(下略)	『高山寺書翰』39頁
明治26年12月	27歳	文庫を設立するもまたあまりに始めから法螺なく、ただ自分一人にて読む考えでやるべし。同志の人篤くこれを聞せんと願えば歎を分かつまでなり。	『土宜往復書簡』52頁
明治27年(1894) 1月19日	28歳	且書籍も多く持ち居り、(少くとも和漢の書一千、洋書、六百冊はあるべし。)(略) 保存の方法を建て、おひおひ大きくし、吾徒のみならず、好志の人には誰にも用しむるやうにしたきなり。	『高山寺書翰』102頁
明治27年 3月	28歳	要するに小生の洋書の集彙は、ちと法螺かは知らぬが、日本一私人の蔵としては一、二なるべく、(略) しかしてこれを英俊の輩にのこし、その輩これを利用して、金粟如来ごときもの十人も出づれば、わが国の仏教は大興立することなり	『土宜往復書簡』168頁
明治27年10月	28歳	仁者へ小生より贈りし書籍は何卒散逸ばらばらに成ぬやうに纏め置き、他日文庫の為の椶子とされたきに候。	『高山寺書翰』237頁
明治34年 (1901) 10月	35歳	現存のものと合した上、仁者及び仁者の心腹を得し一二の人と之を一館に蔵し、少く流がわりながら真言徒及び真言を好むものに限り見すること、いはば真言文庫を作り(以下略)	『高山寺書翰』243-244頁
明治35年 (1902) 4月	36歳	壮年記憶の失せぬ内に可成多く本人銘々所嗜の外学を自修せしめたら、それ以上の事は自分で発生せんこと、浴ずきが浴場にて悟りし如く、鍛工好きが鍛室にて了りし如くならん。故に図書室建ること一番必用なりと存候。	『高山寺書翰』294頁
明治35年 5月	36歳	それよりは本学(教義等)の外の事は、書籍館を作り一同に少しも秘する所なく、(略) 十分に縦覧せしむべし。	『高山寺書翰』300-301頁
明治39年 (1906) 8月 (推定)	40歳	次には大書庫を立てて末輩に自由に見せしめ、老輩は其より新智識を聞き取り、更に徳行を示し播て若輩を偉人偉功の人と仕立んことを望むものなり。	『熊楠研究』7号, 2005年, 175頁

学ぶことが重要なのであり、そのために図書館でいろいろな書物に接して学ぶことが必須であるとする。土宜法龍は、これらの熊楠の主張を真摯に受け止め、真言宗の学校建設にあたって小規模ながら図書館建設を試みている。

ことに当地中学林も微たる一教校にて、まことに幼稚極まる不整頓のものに有之、したがって図書館等も設置は^な作しつつあるも、これまた不整頓のものに候えども、一度御来遊降され候て御一見を乞いたく候のみならず、種々御教示をも請けたきよう、係り員および校長等は申しおり候⁽¹²⁾。

熊楠の指摘によりささやかな図書館を建設したので、意見を聞きたいと述べている。『土宜往復書簡』の説明によると、この史料中にある中学林とは明治34年（1901）に発足した真言宗高等中学林のことである。その後、同校は真言宗聯合京都大学・真言宗京都大学・真言宗京都専門学校と学校名を変え、昭和24年（1949）に種智院大学となり現在にまで至っている。つまり種智院大学の図書館設立については熊楠の意見が影響していたとすることができる。

もう一人、熊楠のこの図書館論に耳を傾けて図書館建設を実行した人物がいる。南葵文庫を設立した徳川頼倫である。徳川頼倫は次に引用する史料にもあるように徳川宗家を継いだ徳川家達の弟である。後に紀州徳川家の養子になり明治39年（1906）に紀州家の家督を継ぎ、貴族院議員にもなっている。頼倫は、若き日ロンドンに留学しており、その時、熊楠が大英博物館を案内するなど二人の間には交流があった。次の史料には、熊楠が図書館を案内したおりに、

日本でもこのような図書館を建設して人々に開放してみてもはどうだろうか、という提案をしたことが述べられている。

序に申す。徳川頼倫（家達公の実弟にて紀州侯の世子たり）龍動に在し日、予をしばしば招き色々話しさせて聞れたり。（中略）予言ひしは欧州ただ見て雲烟過眼で帰たりとて何の益なき夢かパノラマ見しと異なることなかるべし。所志を貫き一事を成すとか、終夜不眠して発明して世を益するとかは貴人のなすわざに適せず、一番此行を無にせぬことは書籍多く買ひ来り、人に見せてやり、其得たる話して聴きて自ら楽まれよと申せし。果して其通りに多々書籍を買ひ入れ、旧来の蔵書と共に飯倉町の邸に南葵文庫といふを公開し、旧臣の子弟を集め縦覧せしめ居る由新聞にて見たり⁽¹³⁾。

徳川頼倫の南葵文庫は、もちろん熊楠の意見のみによって設立されたものとはいえない。しかし、史料にあるように彼の意見が影響していることはあり得るのではないだろうか。その後、頼倫は日本図書館協会総裁となり、図書館行政に深く関わることになる。熊楠自身は、この後も図書館建設には直接関わることは無かったが、その意見は二人の知人によって実現していたのである。

（2）能力に合わせた教育

熊楠の教育論は真言宗の僧侶である土宜法龍との間での議論なので、基本的には僧侶に対する教育が中心となっている。彼の教育論の要点は当時の上からの画一的な教育に対して疑問を投げかけ、自発的な学習こそが重要である、と

いうものである。この意味では、一般的な教育論としてとらえることも出来るだろう。

熊楠は、明治35年5月3日付書翰で次のように述べている。

即ち学校にては主として教義、威儀、経説を一通りおしえ所謂僧が僧らしくなればよし。その上は本人の得手得手が有るから、今の省令の如く何にもかも万人に様におしこむは、小児に餅をすすめて喉を塞ぐと同じ。それよりは本学（教義等）の外の事は、書籍館を作り一同に少しも秘する所なく、（中略）十分に縦覧せしむべし⁽¹⁴⁾

まず、基礎知識を一通り教えて最低限僧侶に必要な教養を持たせる。次に、人間には得意・不得意があるのは当然なのだから、その生徒の能力に則した教育を行うべきであるとする。現今の学校教育のように教育内容を一律に全ての生徒に強要するのは、「小児に餅をすすめて喉を塞ぐと同じ」だと述べ、誤りだと主張する。つまり、必要な基礎教育を施すことは当然ではあるが、それ以上の教育は各人の能力にあわせて行なわれるべきであるという。その各人の能力にあわせた教育を保障する機関が図書館である。このように熊楠は図書館を充実させ、やる気がある生徒には各自の自発性に任せることが重要だとする。

では何故、熊楠はこのように教育問題にこだわるのだろうか。その答えは次の史料により窺われる。

それ一国の開化と申すものは、商売とか兵備とか申すもののみにあらず。また米国ごとく、

一般に『バイブル』よみながら盗し、教育普通しながら無礼残暴なるを申すにあらず。それぞれ秀才、英俊、特異の人多きにもよることと、小生は堅く信じ申し候⁽¹⁵⁾。

「一国の開化」は、経済活動や軍勢力のみによるものではない、優秀な人材こそが必要なのだと主張しているのである。この人材養成のために教育を重要視しているのは明らかであろう。ここで熊楠が考えているのは、人材養成を通じて国の開化を促すこと、すなわち日本が西洋諸国と対等な位置に立つことであつた。では優秀な人材養成について、その具体的な教育方法を熊楠はどのように考えていたのであろうか。次の明治26年（1893）12月24日の書翰は才能ある生徒に対する教育について述べたものである。

さて次には、英傑を養成するの方、これは仏者のことゆえ、万事仏の戒律を守らせて上學寮に入るることとすべし。（略）これをなすには人品を見るべし。人品とは機性なり。尋常の教えになるべき書、また地理、天文以下の一汎智識を導く書をよませ、一月に一度ばかりずつその人を集めて、何ごとを知り得たるか、何を知りたきかを問い答えしめ、その上で理論の書を許し、また試みて、理論に通ぜしうなれば、これに多くの材料を与えてみずから理論を煉らしむべし。要はその人々に自修せしむるにあり。（略）小生は人間が人中の人となるは、有為の人士を作り出すほど上のことはなしと思えり⁽¹⁶⁾。

繰り返しになるが、ここでもまず学生の人品

を見、それぞれの才能を見極め、その上で一般知識を導く書物が重要であると述べる。才能ある人物には、図書館での自由な読書を許す。しかし、ただ自由に読書をさせるだけではない。その成果を他者の前で発表させ、それに指導者がアドバイスを加える。これを繰り返して理論的思考ができるようになったと判断した場合、指導者は学生の思想形成に参考となるような様々な情報を提供する。このような方法を通じて、各自の独創的な思想を発展させようとするのである。最後に熊楠は、人間の最高の生き方は有為な人材を育てることであるとして、「人間が人中の人となるは、有為の人士を作り出すほど上のことはなし」と結んでいる。蓋し名言であろう。

ここで熊楠が述べていることは、一見机上の空論のように思われるかもしれない。しかしこの教育方法は、熊楠が勝手に思い描いた空想の産物ではない。そのお手本の事例を熊楠は知っていたのである。次にその点と熊楠が図書館を重視するもう一つの理由をまとめてみたい。

(3) 熊楠の理想とした教育

熊楠の理想とした教育は、ジョンズ・ホプキンス大学での教育だという。明治26年(1893)12月11日付書翰は、このジョンズ・ホプキンス大学の異色な教育を紹介するものである。

米国に小生の在し日、ジョンズ・ホプキンス大学といふものあり。(略)此学校のしくみは常の学校とは大に異にして、教場にて杓子定規、古人の糟粕、などは教えず、ただ二六時中、書庫の書を読み、扱教授と生徒と尋常の座敷やうな処に団欒して、汝等読得たる見解を述よ

とて、各々読で眼を開し見解をのぶる也。教授はただ之を聞くのみ。是れ狂人の事の如くなりといへども、詳に察するに、法問は沙弥より始めよとの意に叶ひたることにて、学問するに自断自見、自証といふことの必要を示し、少しも油断せしめざる法なれば、人才を育するに甚よきことと思はる⁽¹⁷⁾。

このように熊楠はジョンズ・ホプキンス大学での実例を紹介している。通常の学校とは異なり教授による講義はない。常に学生に図書館などで読書をさせ、その内容を発表させて教授はそれを聞くのみであるという。今日でいえば大学での演習・ゼミに相当するものであろうが、教授による講義中心の教育がなされていた当時としては画期的なものと熊楠の目には写ったのだろう。

アメリカの大学では、19世紀の半ばにドイツ式教育の影響を受け、全く新しい型の大学院生だけの大学を建設しようとする動きが出始めていた。その中で最も成功したのが、1876年に創立されたジョンズ・ホプキンス大学だという。同校はアメリカの大学の中でも大学院教育を重視するという特徴を持ち、この大学から多くの大学教師が輩出した⁽¹⁸⁾。熊楠がこの史料で述べていることは、同大学のこのような特徴から来ることかもしれない⁽¹⁹⁾。いずれにしろ先に引用した史料にある熊楠の英才を養成する方法とは、このジョンズ・ホプキンス大学の教育を参考にしているのは明らかである。

では、何故熊楠はこれほど図書館を中心とする教育を強調するのだろうか。自分自身、アメリカの大学図書館や大英博物館書籍部などで勉強した経験が彼の教育論に影響しているのは言

うまでもない。また既述したように優秀な人材育成に必要なからこれまた当然といえる。しかしそれだけではなく、熊楠が西洋の発展の原点が自由自在に豊富な書物を読むことができる図書館の制度にあると考えていた点も重要であろう。次の明治26年12月11日の書翰はそれを物語っている。

第一に昔し「アレキサンドリア」の博物館といふものあり。名は博物館なれど実は大文庫也。これは古今の大文庫にて、(中略)主として希臘在来の哲学宗教の徒を集め、其書を蓄へ誰にでも見せ、猶太教などの外教徒をもへだてなく入れ、(中略)扱それえは誰にても篤志の士を入れて修学せしめ、又論師も備りて自由に議を闘しめしといふ。今の欧州の學術宗教は全く此余慶に出るものなり⁽²⁰⁾。(下線は引用者)

熊楠は、西洋の学術・宗教が発展したのは、結局のところ「アレキサンドリア」の大図書館があったからであるという⁽²¹⁾。ことの当否はともかく、重要なのは西洋の学術宗教が発展した背景にはこのような大図書館が建設され、そこで自由な学問が出来たことによると熊楠が認識している点である。もう少し敷衍して言うなら、今日西洋が隆盛を極めていく要因は、知識を万民に開放して自由な論議をする中で生れた文化による、と熊楠は考えているのである。したがって、日本を西洋に負けない文化を持つ国にするために熊楠が図書館の存在を重視したのは極めて当然のことであったと言えよう。

ここで、熊楠の教育論の特徴をまとめてみると以下ようになる。まず個人の能力にあわせて教育が必要であること。さらに才能のある人

には、自発的な学習ができる環境を整備すること。それらを実現する方法の一つとして、図書館の建設・充実をはかること。このように熊楠はいう。熊楠が図書館の重要性を強調するのは、もちろん優秀な人材育成のためである。しかし、その背景にあるのは、「アレキサンドリアの大図書館」のように知識を広く開放して、自由な討論ができる文化的伝統により今日の西洋の発展があった、という熊楠の認識であった。

つまり、熊楠は図書館の建設・利用を通じて、人材の養成とともに日本が西洋諸国に負けない文化国家となることを意図していたものと推測される。ここに熊楠の先進西洋諸国への対抗意識を読み取ることができるのである。

3 史跡保存への意識

熊楠は子どもの頃からいろいろな物の蒐集癖があった。例えば鶴見和子は、「南方熊楠は幼少から本を読むことが好きだったが、同時に、野外で動物や植物を採集することを好んだ⁽²²⁾」と述べている。しかし、熊楠が採集したものは、動物や植物だけではなく。土器片や石器など考古学的な出土品にも興味を持ち、採集している事実がある。

東大予備門在学時代の明治18年2月15日の「日記」には、「此日校内にて骨片一個、土器片十五個、石器二個を採集せり⁽²³⁾」とある。また同年4月29日条には「野尻氏より山林学校前にて得たる骨二個、土器片四個、石器一個贈らる⁽²⁴⁾」とある。日記には他にも足利学校の古瓦片に関する記事などが見え⁽²⁵⁾、熊楠の興味の対象は動植物だけではなくことが明らかである。

明治27年1月19日付の土宜法龍宛書翰の中でも、次のように述べている。

且書籍も多く持ち居り、(少くとも和漢の書一千、洋書、六百冊はあるべし。)又介貝、金石、古器、昆虫、錢貨、各国古今の郵便切手、多少の美術品、殊には欧米の植物、数千種、又地衣こけの如きは欧米の学者も羨み、中には実に希有のものもあることなれば、これらをばあまり始めから大きなしかけでなくて、吾真言宗徒養成の用に供し、行く行く見込も立ば、吾徒みな、保存の方法を建て、おひおひ大きくし、吾徒のみならず、好志の人には誰にも用しむるやうにしたきなり⁽²⁶⁾。

この書翰は図書館建設の問題について述べている史料でもあるが、書籍や植物の外に、金石・古器・昆虫・錢貨・郵便切手などの蒐集物の保存を土宜法龍に訴えてもいる。その中に金石・古器があり、考古学上の資料についても興味を持っていることが明らかである。また、熊楠はこれらの諸資料の保存を訴え、そしてそれを誰にでも利用できるような状況を作りたいと述べている。この主張は図書館のときと同様である。明治27年2月5日付書翰の中でも「小生は書籍又古器、色々の珍異の物など、多く家にも亦此地にも蔵せり⁽²⁷⁾」とあり、古器を収蔵していることを述べている。熊楠が古器などの遺物保存の意思を持っていたことが確認される。

また、明治26年12月24日付け書翰では貧しい子どもたちに話す内容に「かつはその村辺の神社などの由来、古蹟の話などきかせ⁽²⁸⁾」とあり、神社や史跡の話題を挙げている。後に神社

合祀反対運動を起こす熊楠であるが、このように早い時期から熊楠は地方にある神社や史跡の重要性を強調していたことになる。

さらに史跡保存については、次に引用する明治27年(1894)7月16日付書翰で明確に述べられている。

扱又右の碑石等は当国〔イギリス―引用者注〕にも前年迄はむちやなりしが、サー・ジョン・ラツボツクの發議で国会へ出し、古碑保存案成立せり。吾邦にもせめては無用の元禄、享保頃に立た寺の跡を立ること等は止めて、右様の弥谷の仏像又増〔益〕田池の碑の残欠、備宮の石宝殿等はよくよく保存したきことなり、(略)仁者等何とかしてこれらも保存の法を立られよ。今日の日本上流輩は蛮夷蠢民ともいふべき輩のみにて、西洋のものといへば十ぱ一とからげの油画、又裸神像などを大に尚び、吾邦の史伝履歴を示すものも其吾邦のものなるの故を以て一概に放棄毀損す⁽²⁹⁾(下線は引用者)

イギリスでの古碑保存法の成立を参考に^{いまだに}して、日本でも保存法制定を提案し、弥谷の仏像などは失われる前に保存したいと史跡破壊への危機感を募らせている⁽³⁰⁾。日本で文化財保護に関する法律が成立したのは、明治30年(1897)の「古社寺保存法」が最初である。しかし同法はその保護対象が狭く限定されていた。高木博志は同法の欠陥について、「優れた美術品をもっている社寺を一本釣りし、補助を与える美術行政として性格づけられ、史蹟・名勝については等閑視された⁽³¹⁾」と述べている。その反省からさらに保護の範囲を広げた史蹟名勝天然記念物保存法が成立したのが、大正8年(1919)

である⁽³²⁾。したがって、これらの法令よりも早い段階で、熊楠は史跡保存の問題に警告を発していたことになる。また、この書翰では同時に、日本の「史伝履歴」を示す大切な史跡より、西洋のものだというだけで無価値のものまでも尊重する日本人の態度をも批判している。この点からも西洋への対抗意識が窺われる。

実はこの史跡保存の問題も愛国心と関係のあることを熊楠は述べる。次に引用する書翰は、明治36年7月18日付のものである。

われわれは、酒顔童子とか葛の葉とか、そんな理にはずれることを信ずるものにあらず。今日の児童もこれを笑う。しかしながら、古伝としてはこれを唱うとき、第一、自国はそんなことを信ずる世から今までつづいたという履歴ある系図となり、なんとなく国を愛するの風を育てるものなり。古伝の功ここにあるなり⁽³³⁾。
(下線は引用者)

この書翰は、熊楠37歳の時のもので史跡ではなく、古伝、すなわち古くからの言い伝えや伝説について述べているものである。古伝は確かに荒唐無稽でそれを史実と考える者は熊楠が言うように小学校の児童でさえいないだろう。しかし古伝の持つ意義は、自国が古くから継続している履歴を持っていることの証明となることだと熊楠は主張する。それにより国を愛する風を育てる、つまり古伝は愛国心を育てるという重要な功績があるのだと熊楠はいうのである。

史跡もそれと同列に論じることができる。例えば柳田国男に宛てた明治44年（1911）6月12日の書翰では、次のように述べる。

小生は神教ごときものに別に関係なく候えども、わが国の古蹟を保存するは、愛国心を養う上において、また諸般の学術上はなほだ必用のことと思う。（中略）国の古きを証するには、この有史前の古蹟の保存もつとも必要に候。白石が秋田氏の譜にいえるごとく、わが国の君も臣も百姓もみな由緒、来歴あるを証するに候⁽³⁴⁾。（下線は引用者）

これは熊楠が45歳のときの書翰であるが、30代と同じ考えを繰り返し述べていることが確認される。ここには「古蹟」が愛国心を養う上で、また学術上においても大切なものであるとはっきり記している。「古蹟」は、日本国民の由緒・来歴を明らかにすることができる貴重なものだとして熊楠は考えていた。つまり、日本が古い文化を持つ国であることを証明するものとして、「古蹟」を重視しているのである。熊楠は神社合祀反対運動を行なう理由を列举する中で、「合祀は勝景史蹟と古伝を湮滅す」⁽³⁵⁾を挙げているが、20代・30代の思想がここに反映されていることが確認できる。

ここでまとめると、熊楠の史跡論について以下の点が指摘できる。まず熊楠は早い段階から史跡保存の問題を考えていたこと。史跡は学問的に重要であるばかりではなく、国民の愛国心を養う上においても重要なものであること。さらに日本が古い文化を持つ国であることを直接証明するためにも貴重な存在であること。以上の点を熊楠は主張する。

愛国心や古い文化を持つ国という点を強調する背後には西洋諸国への対抗意識が存在する。熊楠が40代以降に精力を傾ける「神社合祀反対運動」や「和歌山城保存運動」などは、若き日

に考えていた史跡保存、愛国心養成の実践活動ととらえることができるのである。一般的に熊楠は自然保護運動に従事したという側面のみが今日強調されている。しかし、彼が保存しようとしていたのは、自然だけではなく、人類が営んできた生活の痕跡・文化の跡をも重視していたことを忘れてはならない。

ところで、橋爪博幸は、熊楠がこのような史跡保存の考え方をいつ頃から持ち始めたのかという問題について考察している。橋爪は、熊楠自身は10代から考古学遺蹟に興味を持っていたと前置きしながらも、熊楠の保存という考え方に影響を与えたのは、来日経験のあるイギリス人技師ウィリアム・ガウランドであると指摘する⁽³⁶⁾。

ガウランドは、明治5年(1872)に来日し、同21年(1888)まで16年間日本に滞在したお雇い外国人である。その間、冶金技術を指導するかたわら日本の古墳や朝鮮の支石墓などの調査を続け、数々の研究論文を発表している考古学者でもあった。

このガウランドと熊楠はロンドンで出会い、親しく交際することになる。上田宏範は、「ウィリアム・ゴードン小伝」⁽³⁷⁾の中で、二人の交際の様子を述べている。二人の出会いは明治30年(1897)5月で、以後熊楠はガウランドに傾倒し、熊楠がガウランド邸に夜間でも押しかけて訪問しようとしたエピソードを上田は紹介している。

橋爪はこのような二人の交流の状況から「彼〔熊楠・引用者注〕が保存という考え方に触れたのは英国時代だった。とりわけ、来日経験のある英国人技師ウィリアム・ガウランド(略)の思想的影響が大きい⁽³⁸⁾」と述べる。

たしかに、熊楠がロンドン留学時に知遇を得た学者から思想・学問上での影響を受けたことは紛れもない事実である。その一人であるガウランドから古墳や遺跡について数々の知識を受けたことも間違いのないことであろう。しかし、先に引用した土宜法龍宛書翰(注29書翰)は、明治27年(1894)7月に出されたものである。前述した通り、この書翰の中で熊楠は、史跡保存の意義を強調している。

ガウランドと知り合ったのは、上田が指摘するように三年後の明治30年(1897)であるから熊楠の史跡保存という考えは、ガウランドと知り合う以前にすでに持っていたという事になる。したがって、ガウランドの影響は既に保持していた熊楠の史跡への保存という考え方をさらに確固としたものにした、とまとめることができるだろう。

4 西洋への意識と日本の政体

ここまで、熊楠の教育論と史跡保存論に注目して、熊楠の若き日の書翰の分析を行ってきた。そこから抽出されることは、何れにおいても熊楠は西洋への対抗意識を持ち、日本を西洋諸国と対等な国にすることを意識している点であった。この点は次の明治27年(1894)7月16日の法龍宛書翰が端的に物語っている。

それには何卒して支那、日本の固有の文化を洋人に示したいぢや。凡て攻守は勢を異にするもので、日本で大言吐くよりは欧州に居て欧人と論ずるは千倍も難こと、恰かも長州人が数千で京に打入り数百の桑会人に破られやうなことで、穴にあれば人の指をもはさみ切り、外に出れば甲殻丸つぶれに踏殺さる。然れども予は此

事をのみ目的として久く海外にあることなれば、你何卒前述の書を予におくれ⁽³⁹⁾ (下線は引用者)

「支那日本の固有の文化を洋人に示したいぢや」これは正に熊楠の本音であるだろう。熊楠は、日本で大言を吐くよりも、実際に西洋の学界という相手の土俵で西洋人を相手に論争することが重要だという。これを熊楠は、イギリスで発行する学術誌『ノーツ・エンド・キークリス』などに英文論文を投稿することで実践していたわけである。また、地方文化を大切にする点も上の書翰にある日本固有の文化にほかならないからである。この地方と中央の関係についても熊楠は繰り返し発言する。

かつ小生、從來、一にも二にも官とか政府とかいうて、万事官もたれで、東京のみに書庫や博物館ありて、地方には何にもなきのみならず、中央に集権して田舎ものをおどかさんと、万事、田舎を枯らし、市都を肥やす風、学問にまで行なわるるを見、大いにこれを忌む⁽⁴⁰⁾。

この書翰は熊楠28歳時のものである。政府の中央集権的施策に反対の態度を表明しているものであり、熊楠の考えに地方分権的な思想があることがわかる。この点は、明治27年2月5日付書翰でも窺われる。「而して小生の素志は、何様吾国在来の風として一にも官、二にも政府云々云々といふをきらふ故に、徹頭徹尾之を民間に残し、地方に留めたきなり⁽⁴¹⁾」この書翰では、「南方集彙」として自分の蒐集した書籍だけでなく蒐集物全てを法龍に託してその保存を依頼している。国の大学に寄贈するのではな

く、それを民間で、さらに地方に残したいと強く述べている。中央政府への不信感は、ほぼ10年後になっても消えていない。熊楠37歳の時点の書翰では「凡そ吾邦人の所為を見るに、一にも二にも政府政府と無効無能の政府に依憑し、為に血肉を搾りし租税も過半は埒もなき官吏の博奕の資となる等のこと多く⁽⁴²⁾」とあり、政府批判は続いている。

この中央に対する意識は、彼の地方文化を重視する表現でもある。中央政府あるいは官僚に対しての不信感は、西洋への意識と共に、熊楠の思想の底流にあるものといえる。明治政府も南方熊楠も常に西洋に対抗しようとする意識を持ち、西洋諸国と対等な関係になろうとする点では一致している。しかし、その手法が違う。明治政府は中央集権的な政治体制を整え、富国強兵策をもって、その手段とした。一方熊楠は、地方分権的に多様な日本の文化を保持しつつ、学問を通して世界的に名誉ある地位を得ようとした。当然政府の手法と熊楠の手法とは相いれないものであった。この後、熊楠は「神社合祀反対運動」をはじめとして、国や県あるいは町のレベルに至るまで地方文化を守るために官の施策についての反対意見を表明し、あるいは反対運動を推進する。これらの行動は彼の思想を考えると当然の結果であったといえる。

おわりに一若き日の思想とその後の活動との関連

本稿では、土宜法龍に宛てた書翰での教育論・史跡保存論に注目して検討を行なった。その結果、20代から30代での熊楠の考えの底流にあるのは西洋への対抗意識、すなわち西洋列強に負けない日本を作り上げようとする意識で

あった点を指摘した。

「はじめに」でも述べた通り、熊楠の40代以降の活動は、民俗学・植物学・社会運動という三つの分野に分かれる。これらの活動の底流にあるものも、西洋への対抗意識であった可能性が推測される。例えば、民俗学では、西洋で発見されたことは、東洋では既知であることを論じる論文が多い⁽⁴³⁾。これは、西洋に対して日本を含む東洋の学問が優れていたことを立証するものである。また、日本各地の伝説・民話を保存しようとする彼の民俗学は、地方文化を保存し文化の多様性を保持することを考えていたものと解釈できる。「神社合祀反対運動」や「和歌山城保存運動」などの史跡保存活動も、地方文化の保存という観点から理解可能である。これらは諸外国に無い日本の特徴を残そうとした試みであると評価できるだろう。植物学では、熊楠は、採集した種の数にこだわっていた⁽⁴⁴⁾。このことは、西洋の学問的業績を超えようとする意識から生じたことだと考えられる。既述したように熊楠は、「ミナカテルラ・ロンギフィラ」という生木に発生する変形菌を発見する。これは、当時の常識を覆す発見であった。このような研究は、そのまま、西洋に対抗する際の有力な手段になると熊楠は考えていたのである。

また、熊楠は、日本が硬直した単一的な文化国家になるよりも、複数の文化（中央の文化や地方の文化）が併存する多様な文化国家となることを志向していた可能性も指摘できる。そのことが西洋に対抗する一つの有力な方法だと認識していたのかもしれない。何故なら、複数の文化の存在により日本には地方にも古い文化が存在していることが証明され、それにより日本

の優越性を主張できるからである。

このように見てくると、その後の彼の行動（民俗学、植物の分類学、自然・史跡保存への社会運動）は、西洋への対抗意識が大きな原動力となっていたと考えることができる。しかし、以上の点は、本稿では、まだ可能性の指摘にとどまっているにすぎない。今後は、彼の社会運動や民俗学・植物学研究の背後にあった動機を個別的に検討することにより、本稿で指摘した若き日の彼の思想が以後の活動にどのように反映されていたか、という点を追求することが課題となる。

〔投稿受理日2010.5.22／掲載決定日2010.6.10〕

注

- (1) 南方熊楠の伝記としては、笠井清『南方熊楠』（人物叢書145 吉川弘文館、1967年、新装版は、1985年）、飯倉照平『南方熊楠－梟のごとく黙坐しおる－』（ミネルヴァ書房、2006年）がある。また千本英史「等身大の熊楠へ」（『國文學』第50巻8号、2005年）では、熊楠を考える際には、二つの視点が重要であるとする。一つは社会階層のとらえ方の問題、一つはナショナリズムの問題である。本稿はこの内、後者の問題を視野に入れている。
- (2) 萩原博光「『植物学者』南方熊楠」（荒俣宏・環栄賢編『南方熊楠の図譜』青弓社、1991年所収）
- (3) 神社合祀反対運動については、中瀬喜陽編『神社合祀反対・自然保護論集』（南方文枝『父南方熊楠を語る』日本エディタースクール出版部、1981年所収）、橋爪博幸「南方熊楠と「糸田猿神祠」合祀事件－神社合祀反対運動の動機をめぐって－」（『人間環境学』第6巻、1997年）、武内善信「南方熊楠と世界の環境保護運動」（『熊楠研究』6号、2004年）、同「南方熊楠と『牟婁新報』－神社合祀反対運動を中心に」（『牟婁新報（復刻版）第2期・第3期 解説』不二出版、2006年）、同「日露戦後の自然保護運動と「エコロジー」」（『同志社法学』59巻2号、2007年）などが参考になる。
- (4) 熊楠の市町村合併反対運動については、雲藤等「田辺・湊・西ノ谷三町村合併問題と南方熊楠」

- 『社学研論集』第13号, 2009年)を参照。
- (5) ただし、法龍からの来簡は、明治28年1月のものの1通と明治33年12月のもの3通が残っている。そのため、正確に言うと第1期は、明治26年から同28年初頭まで、第2期は、明治31年末からということになる。
 - (6) 飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠 土宜法竜 往復書簡』(八坂書房, 1990年)。
 - (7) 「南方マンダラ」についての主な研究は以下の通りである。鶴見和子『南方熊楠』(講談社学術文庫, 1981年, 初出は1978年)。同『南方曼陀羅論』(八坂書房, 1992年)。同『南方熊楠・萃点の思想』(藤原書店, 2001年)。松居竜五『南方熊楠一切智の夢』(朝日新聞社, 1991年)。千田智子『森と建築の空間史 南方熊楠と近代』(東信堂, 2002年)。橋爪博幸『南方熊楠と「事の学」』(鳥影社, 2005年)。中沢新一『森のパロック』(講談社学術文庫, 2006年, 初出は1992年)。
 - (8) 奥山直司・雲藤等・神田英昭編『高山寺蔵 南方熊楠書翰 1893-1922』(藤原書店, 2010年)。
 - (9) 松居竜五2005, 133頁。
 - (10) 明治35年4月18日付書翰『高山寺書翰』294頁。
 - (11) 『土宜往復書簡』357頁。
 - (12) 明治34年10月25日消印書翰『土宜往復書簡』253-254頁。
 - (13) 明治35年5月3日付書翰『高山寺書翰』301頁。
 - (14) 『高山寺書翰』300-301頁。
 - (15) 『土宜往復書簡』12頁, 明治26年12月(編者による推定)。
 - (16) 明治26年12月24日付書翰『土宜往復書簡』67-68頁。
 - (17) 明治26年12月11日付書翰『高山寺書翰』39-40頁。
 - (18) 中山茂 1988, 43-45頁。
 - (19) アメリカの教育学者であるジョン・デューイは創立から2年しかたっていないジョンズ・ホプキンス大学大学院で学んでいる。對馬登は「デューイのジョンズ・ホプキンス大学時代(1882~1884)ー前編ー」(『尚美学園短期大学研究紀要』第14号, 1999年)の中で、デューイの大学での学習の様子を綴った手紙を紹介している。それには以下のようにある。「彼(モリス)のもとでの私[デューイー引用者注]の課業は、英国哲学史ーベーコンからスピノザまでーが四時間あります。そして、いわゆる哲学演習が週二回です。私は、演習はい

ろいろな面で非常に有益であると思います。それは認識論に関連する原典の学習のためです。課業はこのような仕方なされています。プラトンのテイテトス(翻訳で)を読むことから始めて、それと一緒に原典ーヘラクレイトスやデモクリトス, プロタゴラス等の作品ーによって示唆される問題に関連する題材がいくつか与えられます。一つの題材が各人に与えられ、一人ひとりがその著者の作品についての残されている断片を調べ、主なる典拠等を参考にして、みんなの前でそれを説明するように望まれます。」

これをみると、もちろん講義もあるのだが、熊楠が述べていることと類似の内容を読み取ることができる。

- (20) 明治26年12月11日付書翰『高山寺書翰』39頁。
- (21) モスタファ・エル＝アバディ著・松本真二訳『古代アレクサンドリア図書館ーよみがえる知の宝庫』(中公新書, 1991年)では、「アレクサンドリア期以前、知には地域的限定があった。しかし、人類の歴史の中で初めての普遍的図書館としてアレクサンドリア図書館が登場するとともに、知もまた普遍的なものとなったのだと言えよう」と同図書館の存在意義について述べている(同書, vii頁)。
- (22) 鶴見和子, 1998, 227頁。
- (23) 『南方熊楠日記』第1巻, 八坂書房, 1987年, 12頁。(以下『日記』と略記)
- (24) 『日記』第1巻, 24頁。
- (25) 『日記』第1巻, 44頁。
- (26) 明治27年1月19日付書翰『高山寺書翰』102頁。
- (27) 『高山寺書翰』122頁。
- (28) 『土宜往復書簡』65頁。
- (29) 明治27年7月16日付書翰『高山寺書翰』214-215頁。
- (30) 遺跡保存の危機的状況は現在でも同じである。椎名慎太郎は、環境保護が不満足なものとは言いながらも進展を見せているのに対して、遺跡の方は開発工事などで急激に消失している事実を指摘している(椎名慎太郎『歴史を保存する』講談社, 1983年, 416頁)。
- (31) 高木博志, 1997, 311頁。
- (32) 文化財保護委員会編『文化財保護の歩み』1960年, 487-490頁。
- (33) 『土宜往復書簡』320頁。また、「史蹟名勝天然紀

- 念物保存法」成立に尽力した黑板勝美も熊楠同様歴史的な伝承を重視していた。黑板は歴史的には真実ではないが、国民に広く信じられ、影響を与えた種類の伝承を伴う史跡も保護の対象になると主張している（黑板勝美「史蹟遺物に関する意見書」(『史学雑誌』23巻5号, 1912年)。
- (34) 明治44年6月12付書翰『柳田国男 南方熊楠 往復書簡』(以下、『柳田往復書簡』)(平凡社, 1976年) 42頁。
- (35) 『全集』7巻, 581頁。
- (36) 橋爪博幸 2000。
- (37) 上田宏範 1981。
- (38) 橋爪博幸 2000 153-154頁。
- (39) 明治27年7月16日付『高山寺書翰』207頁。
- (40) 明治27年3月2日付書翰『土宜往復書簡』149頁。
- (41) 明治27年2月5日付書翰, 『高山寺書翰』123頁。
- (42) 明治36年11月2日付書翰『高山寺書翰』318頁。
- (43) その一例として, “Finger-Print” Method (「拇印考」)がある。これは, 個人識別のために拇印を用いたのは, 東洋(中国人)が最初に発明したことを立証するものである。飯倉照平監修『南方熊楠英文論考』(集英社, 2005年, 124-140頁)参照。
- (44) 例えば, 平沼大三郎宛書簡では, 次のような記述がある。「是れにて粘菌中尤も多種を含む *Physarum* 属は世界中の凡て六十一種十四変種内
日本 三十七種 三変種 米国 五十種九変種
英国 三十三種 八変種 となり申候。
僅に二, 三ヶ月前迄最少数なりし日本が種数に於て英国に勝つこととなり申候」(南方熊楠顕彰館編『南方熊楠平沼大三郎往復書簡』2007年, 285頁)
平沼大三郎宛の書翰では, 英国や米国との間で採集した粘菌の種数を競おうとしている記述が散見される。熊楠の粘菌研究は図譜を作成し, 採集した種の数で西洋を凌駕することを一つの目的としていたことが明白である。
- リアム・ゴーランド『日本古墳文化論』創元社, 341-353頁。
- 奥山直司・雲藤等・神田英昭編 2010『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』藤原書店, 4+370+3頁。
- 高木博志 1997『近代天皇制の文化史的研究』校倉書房, 400頁。
- 鶴見和子 1998『コレクション鶴見和子曼荼羅V 水の巻 南方熊楠のコスモロジー』藤原書店, 2+542頁。
- 中山茂 1988『アメリカ大学への旅 その歴史と現状』リクルート出版, 2+242頁。
- 橋爪博幸 2000「神社合祀と史跡の滅却-湊村の神社合祀計画に対する南方熊楠の行動とその理由-」『熊楠研究』2号, 138-158頁。
- 松居竜五 2005「南方マンダラの形成」松居竜五・岩崎仁編『南方熊楠の森』方丈堂出版, 132-158頁。
- 『南方熊楠邸資料目録』田辺市南方熊楠邸宅保存顕彰会, 526頁。

参考文献

- 荒俣宏・環栄賢編 1991.『南方熊楠の図譜』青弓社, 229頁。
- 飯倉照平編 1976『柳田国男 南方熊楠 往復書簡』平凡社, 4+3+464頁。
- 飯倉照平・長谷川興蔵編 1990『南方熊楠 土宜法龍 往復書簡』八坂書房, 4+v+445頁。
- 上田宏範 1981「ウィリアム・ゴーランド小伝」ウィ